



映画雑感 14

柴生田 晴四
(経済倶楽部理事長)

▼昨年10月以降公開の邦画から。まず「空に住む」。突然両親を失い、叔父の提供してくれたタワーマンションに住むことになったヒロインは、ひよんなことから隣室に住む人気タレントと知り合います。といってもこれはラブストーリーではありません。喪失感を抱えながら出版社勤務を淡々とこなすヒロインと人気者でも何か満たされない若者とが織りなす日常が、どこか愛おしい作品でした。

▼「朝が来る」は、子宝に恵まれず、養子縁組によって授かった幼児を大切に育てる夫婦のもとに突然実の母を名乗る若い女性が現れます。家族の愛情に恵まれず、家を出て悲惨な境遇に追い込まれていく少女が並行して描かれ、やがて二人の母が心を通わせる瞬間がやってきました。抑制された演出が光る一作。

▼「罪の声」はグリコ・森永事件を下敷きにした意欲作。過去の事件の謎に挑む新聞記者と、何も知らぬ間に声を脅迫に使われた過去を掘り起こすテラーの主人が出会い、やがて事件に巻き込まれたもう一つの家族の悲劇が明らかになります。社会の不条理と時代の空気がしみる作品。ちなみに、記者会見の会場に当倶楽部のホールが使われています。

▼黒沢清監督が第77回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞（最優秀監督賞）を受賞した「スパイの妻」は、満州事変前夜の中国で行われた陸軍の暴走を暴こうとする貿易商とその妻を高橋一生と蒼井優が好演。国家権力に唯々諾々と従いがちな日本人の現状への警鐘でもあります。

▼「バルボラ」は、故手塚治虫の大人向け漫画「ぼるぼら」を息子である手塚眞監督が映画化。耽美小説家が新宿の街頭で酔いつぶれていた少女を自宅に連れ帰ります。実写化困難と言われた愛と狂気に彩られた幻想の世界が、主役の稲垣吾郎と二階堂ふみ、そして名手クリストファー・ドール撮影で見事に映像化されました。

▼「ミセスノイズ」では隣人同士の些細な対立がSNSによって大事件へ発展します。当人同士のきちんとした対話がないままにトラブルが社会に拡散していく悲喜劇がユーモラスに描かれ、結末にも好感がもてました。

▼「おもいで写真」は熊澤尚人監督によるオリジナルドラマ。夢破れて故郷の富山に帰ったヒロインは元カレの誘いで遺影撮影の臨時職員に雇われます。最初はだれも応じてくれなかった老人たちですが、やがて「思い出の写真」という呼びかけに興味を示すようになります。老人たちと触れ合うことで人生の意味を見出していく主人公を通して、高齢化社会における様々な問題を考えさせられる佳作。